

第31回全国町並みゼミ

卯之町大会を終えて

2008卯之町ゼミ実行委員会

実行委員長

大氣 博志



手作りの町並みゼミ

「第31回全国町並みゼミ卯之町大会」申し込み参加人数515名、3日間の参加延べ人数1,030名、県内、地元からもたくさんの方の参加をいただきケガ人やトラブルもなく、開催日はすべて良いお天気にもぐまれ、無事3日間を執り行う事ができました。

今回のゼミは「町並みゼミ」の原点に戻りたいいわゆる「手作りゼミ」でした。行政などの支援を受けず、民間の力で大会の準備、開催のすべてを執り行いました。そのため実行委員会、スタッフなど関係者が知恵を絞り、従来



町並みゼミ全体会の様子

にない様々な試みを取り入れた大会となりました。中でも一番参加者の皆さんに喜んでいただいたのが、子供たちの絵を貼り付けた新聞紙で作ったゼミバッグではなかったかと思えます。

新聞紙で作るゼミバッグの始まりは、実行委員会のメンバーから「お金がないなら新聞紙でバッグを作ったら」という素朴な提案でした。バッグの効果は私たちが思っていた以上に、バッグ作りは愛媛新聞などでも採り上げられ、児童館、公民館などあちからこちらでバッグ作りの講習会を開きました。そして、たくさんの方々がバッグ作りを通してゼミに協力していただくことになり輪が広がっ

ていきました。バッグに貼る絵は地元の保育園や幼稚園、そして小学校、中学校の生徒にお願いして描いていただき、約800枚も集まりバッグを飾ることになりました。他にも、会場準備、町案内、琴演奏、交流会、草もち等々、卯之町ゼミ全体がたぐさんの住民の見えない善意の手で支えられて運営されていきました。

個性ある、町並みゼミを めざした卯之町大会

3日間行われる全国町並みゼミのプログラムも、今回の卯之町ゼミでは大幅に変更しました。本来であれば2日目に執り行う分科会を初日に7カ所に分散して開催しました。全国各地から集まる目の肥えた方々に満足していただける分科会を目指して、分科会担当者7人が中心となり、卯之町ゼミで自分たちの思い、行っている事を表現するために何をしなければならぬかを真剣に考え取り組んでいただいたおかげで、過去のゼミになんら遜色のない個性ある分科会ができたと思います。そして、自分の選んだテーマの各分科会で50人規模での地元の方々との交流会も、おおむね良い反応がいただけたのではないかと思います。

2日目、3日目は愛媛県歴史文化博物

館を会場として全体会を執り行いました。

2日目、基調講演をやめて「各地からの報告」の充実に力を入れました。北は岩手から南は長崎まで全国10ヶ所の報告では、町づくりの「今」を知っていただけたのではないかと思います。特に、今回のゼミは四国で27年ぶり開催ということで「四国からの報告」も8カ所組むことで西予市、愛媛の交流だけにとどまらず四国というさらに大きなエリアのつながりができ、今後につなげて行くきっかけが出来たと思います。また、お昼にはランチミーティング形式で部門別交流会を、夕方にはブロック別会議を開催、夜の連盟主催の「大交流会」は、とても盛り上がり参加者に満足していただけたようでした。

最終日は、ゼミ討議「地域遺産を考えたまちづくりのこれから」の内容も好評で、西村幸夫氏（東京大学大学院教授）、後藤治氏（工学院大学教授）、溝渕博彦氏（高知県教委文化課）の御三方の知名度も手伝ってか参加者が多く、ゼミ総括を行った連盟の副理事長福川裕一氏（千葉大学教授）が「最終日にこんなに人が残っているゼミは久しぶり」との笑いをこめたコメントをいただき3日目の手ごたえを感じました。

閉会式の最後には、（コンサートでも

ないのに）スタンディングオベーションとなり、会場とスタッフが一体となりゼミの成功をお互いが確認できたことにも感動しました。

踏み込んだまちづくりを

卯之町ゼミにかかわったスタッフすべてが、「おもてなし」「交流を合言葉に」「だんだん学ぼう、よもよも人づくり」の大会テーマどおりのゼミが行えたと思います。

何より良かったのは、地域の人たちが少しずつでも、自分のできることでお手伝いをしてくださったことだと思いません。今すぐに何かが起こるわけではないでしょうが、少なくともゼミに関わった方に地域を見直すきっかけ、何らかの変化があっただけでも、このゼミを開催した意味はあったと思います。そして、私の希望でもあった「この大会を通して、地域のさらなる交流がはじまり、踏み込んだまちづくりをスタートすること」が始まりました。